



明治維新150年特集

五卿と内山の射撃場

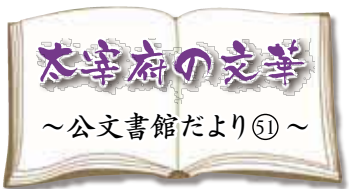
宇智山村にて発砲場所でき、下宿の輩ともがらのおのおの行き向いて見物かたがた装条銃じやうじやうじゆう十五発これを発す、七十間(約120m)ばかりなり。

慶応3(1867)年5月27日、五卿の一人、東久世通禧あづきよしみちよしが日記に残した内山村の記録です。この日、五卿と従者が内山で射撃訓練を行います。使用した銃は「装条銃」と呼ばれる西洋式ライフル銃です。当時、内山は薩摩藩や五卿が射撃訓練を行う場所でした。

内山における射撃についての最も古い記録は、慶応2年4月24日、薩摩藩が小銃の試し撃ちを行ったというものです。当時、薩摩藩は幕府による五卿の強制送還を危惧しており、太宰府に滞在する幕吏を威圧する目的があったようです。連日、北谷辺りで大砲・小銃の射撃訓練を行い、その音はこの地域に轟とどろいたといっています。

五卿も銃や射撃訓練には多大な関心を寄せていたようです。6月18日には薩摩藩士大品格之助(綱良)から「六連銃(回転式拳銃か)を受け取っています。また、7月3日に実施された薩摩藩の大砲射撃には、大山の誘いのもと東久世が「内々に」内山へ行き、これを見学しています。さらに、11月にも五卿が薩摩藩の内山における射撃訓練を見学したことが、資料より確認できます。

慶応3年に入ると、五卿は従者より、幕府が新將軍徳川慶喜のもとで兵制をことごとく西洋式に変革し、訓練に励んでいるという報告を受けます。これが後の訓練規則の改革に



影響したのかもしれませんが。4月21日には、五卿は長州藩より装条銃30丁と弾薬3000発を500両で購入し、同日23日に従者らに支給しました。また、五卿は毛利家より「二入込騎馬銃」(後装式で短銃身の銃)5挺を進呈され、翌月12日に東久世が内山で試射を行っています。こうした中、冒頭で述べた射撃場が新たに完成し、射撃訓練を行う環境が整備され、従者も参加しました。

8月6日に五卿の主座三条実美(さんじゆじやう)は従者一同を集め、国難の時節につき国家のため文武の稽古に励むよう命じるとともに、日々の稽古の課程を言い渡します。その中には2と7が付く日に射撃訓練を行うことが盛り込まれていました。実際に射撃を行った記録を見てみると、4月に銃を購入して以降、内山で計36回射撃訓練を行っています。特に9月は最も多い7回を数え、2と7が付く日以外にも訓練を行っている日が見られます。

このように内山は、当初薩摩藩が射撃訓練を行う場所でしたが、のちに五卿と従者が射撃を行う場所となりました。慶応3年12月19日に太宰府を発つまで、五卿は新しい時代の到来を期待しつつ、射撃訓練に励んでいたであろう姿が想像できます。

公文書館 篠崎 将貴

「明治維新150年特集」は今回で終了です。「愛読ありがとこう」がありました。

発掘調査の衝撃

大宰府史跡発掘50年にあたって

大宰府史跡の発掘調査が始まったのは昭和43（1968）年のことですから、今年はそれから50年という節目にあたります。

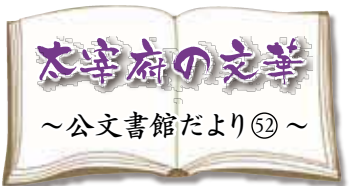
同41年、文化財保護委員会（現文化庁）は、福岡県教育委員会からの大宰府史跡の指定拡張申請を承けて大宰府史跡の大幅な追加指定計画を発表します。それは大宰府政庁跡およびその後

背地を中心に、約120ヘクタールを指定域とするというものでした。これ以降、大宰府は史跡の保存か、開発かをめぐって揺れ動くこととなります。このことは史跡の所在する地域住民の生活をも含めて、史跡のありかたを根本的に問うものとして大宰府を全国的に注目させることとなったのです。最終的には、昭和

45年9月21日、特別史跡「大宰府跡」の追加指定、および「大宰府学校院跡」、「観世音寺境内及び子院跡」の新たな史跡指定が告示されます。計画発表から数えて、実に4年後のことでした。

さて、発掘調査が開始された昭和43年は、開発か保存かという議論の渦中にありましたから、その調査は史跡保存のために遺構の状況を具体的に示し、その価値を明示すること、および今後遺跡を保存、整備、活用するため

の基礎資料を得ることを、当面の課題としました。実質的な調査は11月に始まります。第1次調査は、大宰府政庁南門跡・中門跡で実施され、遺構の残存状況を把握すること、また今後の調査の基準とするため、南門跡・中門跡と正殿跡の遺構を通して、その中軸線を確認することを目的としました。



その結果は、「大宰府政庁は天智朝に創建されて以降そのまま継続し、天慶4（941）年藤原純友の乱による焼き討ちにあつて焼失、その後再建されることはなかった」というそれまでの通説を大きく覆す衝撃的なものでした。発掘調査では、政庁域では3度の建て替えの跡が確認され、また最後に建て替えられたのは、純友による焼き討ちの後であることも分かったからです。その後の調査もふまえて、現在では大宰府政庁のうつつりかわりは、次のように考えられています。

第Ⅰ期 7世紀後半（天智朝）

8世紀初頭

第Ⅱ期 8世紀初頭～10世紀前半

〈天慶4（941）年〉

第Ⅲ期 10世紀後半～12世紀前半

大宰府市公文書館 重松 敏彦

町絵師齋藤秋圃の交友関係

齋藤秋圃（1772～1859）は、江戸時代後期の筑前を代表する絵師の一人で、晩年は大宰府に住み町絵師として活躍しました。本年4月、新しく太宰府市の指定文化財になった齋藤家資料は、この秋圃と息子梅圃を中心とした約1400件に及ぶ新発見の資料群で、絵師の家の資料らしく画稿（下絵など）が主ですが、100件を超え

る文書類も含まれていきます。特に秋圃に宛てられた書状の差出人を見ると、その豊かな交友関係を明らかにすることができます。

まず俳人については、蕉風（松尾芭蕉とその門人たちの作風）の復興に寄与したことで知られる大坂の大江丸の名がみえます。

秋圃は絵俳書や俳諧摺物とよばれる俳諧に絵を添えた書籍や印刷物を京坂の版元から出版しています。が、そうした中で、大江丸と関係を持ったのかも知れません。

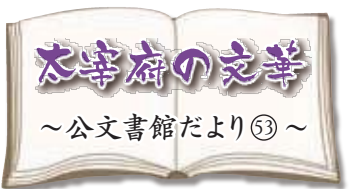
絵師としては、京都で活躍した円山四条派の紀広成の名が目を引きまします。秋圃は京都生まれで円山応挙（円山四条派の祖）らに師事したと伝えられます。

すが、京都の画壇との結びつきをこの書状で確認できます。また、中国の画人江稼圃が秋圃に宛てた書状も残ります。長崎で江稼圃に師事しようとした秋圃は、その絵の技量をみた江稼圃から断られたというエピソードが残っていますが、両者の確かな交流を示す資料としてこの書状は貴重です。

僧侶との交わりで注目すべきは博多聖福寺住持仙厓の書状です。

両者はお互いがお互いの肖像を描くなど親しく交わっていました。この書状の宛名には2羽の鳩の絵が描かれており、「双鳩」という秋圃の雅号を表しています。名前を絵で表現するところに、仙厓の洒落心と秋圃への親しみを感じとることができるとでしょう。

その他にも学者・医者・商人・神官などさまざまな職業の人物との交流をこの資料群から読み解くことができます。齋藤家資料の本格的分析はまだはじまったばかりです。今後の研究の進展が期待されます。

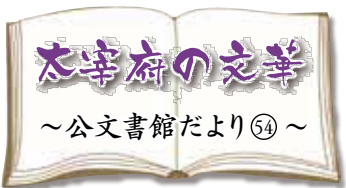


イタツケとダザイフ（飛行場建設と採石問題）

公文書館所蔵「中嶋家資料」の中には、米軍第6160航空基地航空団発行の週刊誌『ブレイン・トーク』1952年10月18日号があります。『ブレイン・トーク』は1948年、団員向けの読み物として創刊され、発刊からちょうど50号目となるこの号には、異動情報やフットボールの基地対抗試合のほか、一面を割いて太宰府天満宮の紹介記事が載せられました。記事では梅と菅原道真にまつわる伝説とともに「東風吹かば……」の歌が英訳され、太宰府天満宮は九州における文化の頂点の一つと評されます。

第6160航空団は当時、板付基地で朝鮮戦争のための武器や食料・資材などの供給に従事した組織で、休戦協定成立の翌年である1954年まで継続します。板付基地とは、進駐軍が接收した席田飛行場（板付飛行場と改称）・小倉陸軍造兵廠（春日製造所・九州飛行機雑餉限工場の総称で、後者2つは附属基地として「ベースワン」「ベースツー」（ベースツーは1949年に返還）と呼ばれました。兵員・軍属やその家族の居住のため基地外にもハウスが設けられ、娯楽施設としてカフェーが置かれるなど（『春日市史』）、基地周辺では彼らのために持ち込まれたアメリカ文化がまちの日常風景となります。

ところで「九州文化の頂点」を有する太宰府町は、この後米軍による砂利採取



問題で悩むこととなります。1954年9月、飛行場建設のための石材採取が町内の採石場（松川・只越など）で盛んになります。発破や砂利運搬車両の疾走により道路・水路や家屋の破壊事故が頻発、また沿道で交通死亡事故が発生するなど、住民への被害が深刻となつていきます。1955年、水城村と合併した太宰府町は5月に新しい議会を作りますが、同時に「駐留軍関係被害対策特別委員会」を設置して対策を講じます。しかし、駐留軍被害に関する事項は調達庁の受け持ちで、被害の申請から補償の決定までかなりの時間を要しました。また当時、実際の採石作業は米軍第802工作航空大隊が行っていたのですが、契約は採石許可を請け負った福岡市の会社と町との間で結ばれており、被害の補償は会社が負担することとなつていました。このことが米軍との

交渉を難しくさせましたが、町は同年7月に米軍・会社・福岡県調達局・那珂土木事務所と協議を持ち、即時3日間の採石停止と道路の補修、採石時間の限定などを決めました。補償問題の解決にはもう少し時間がかかることとなりますが、つかの間、まちから轟音や振動が消えます。同年9月には採石打ち切りとなり、ようやく太宰府に元の静けさが戻りました（『太宰府市史 通史編Ⅲ』）。

太宰府市公文書館 藤田 理子

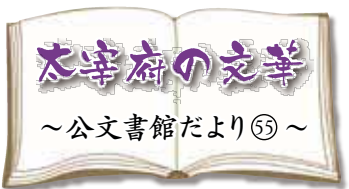
定遠引揚げ作業と小野隆助

太宰府天満宮の社家出身で幕末より活躍し、衆議院議員・県知事を歴任した太宰府の名士小野隆助は、日清戦争で沈没した清国の北洋艦隊の旗艦「定遠」から数々の物品を引き揚げました。作業は明治28（1895）年7月より開始し、明治30年11月に終了します。

定遠には「鎮遠」という同型艦が存在し、両艦は北洋艦隊に配備されました。外務省の記録には2隻を「独逸ニ注文セシ砲塔甲鉄ナル定遠ノ如キ鎮遠ノ如キ何レモ七千四百三十噸ノ姉妹戦艦（中略）其頃東洋ニ於テハ観ルニ稀ナル者ナリ（後略）」と記しており、日本にとつて大きな脅威でした。

北洋艦隊は日本海軍の連合艦隊と黄海で衝突後、旅順港を経て威海衛へと後退します。その際に鎮遠は座礁し、定遠は水雷艇による夜間襲撃で大破します。鎮遠は威海衛で捕獲され日清戦争後に、戦利艦として日本海軍に編入されます。近代化間もない日本にとつて鎮遠は大きな戦力となりました。

北洋艦隊の引揚げ作業は日清戦争中に計画されました。それは海軍が造船技術・砲術などの調査研究として引揚げを求めたからです。その作業は複数の「引揚許可人」が回収許可を申請して行われ、小野は明治28年5月に許



可を得て「定遠号引揚許可人」として定遠を担当しました。引き揚げた武器・弾薬は海軍が買い上げました。そして引き揚げた物資の多くは、呉・佐世保・横須賀の海軍基地へ納められ、黄龍旗（清国の旗）と号鐘は宮内省へ献納されました。残りの一部は展示会や現在も太宰府天満宮境内に遺る「定遠館」の門や梁や床の柱などに使用されました。定遠館は小野が私財を投じて建設したものでその後、明治35年に太宰府天満宮で開催された菅公一千年祭の際に黒田家主の黒田長成を迎える際にも利用されました。

日清戦争中、戦地で入手した兵器などは全国各地で「戦利品」として公開され、新聞を賑わせました。日清戦争後、福岡県下では神社・学校・博物館に配布され、太宰府には太宰府天満宮・竈門神社・建設計画中の鎮西博物館などに武器・弾薬の品々が戦利品として配布されました。

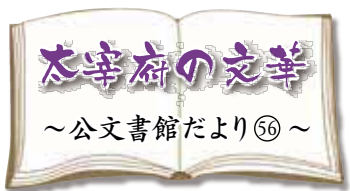
小野隆助は日清戦争後の明治29年1月25日から定遠より引揚げた戦利品の展示会を太宰府天満宮の会議所で開きました。また、明治31年にも太宰府の自宅にて引揚げ品を陳列して、公開しました。

大宰府跡と大宰府史跡

大宰府史跡発掘50年にあたって(2)

「大宰府跡」と「大宰府史跡」、よく似ていますが、その意味するところは大きく異なっています。まず、「大宰府跡」は国特別史跡の指定名称です。その範囲は政庁地区を中心に、西は蔵司地区、東は月山地区、さらに政庁地区北側の後背地を含む一帯です。西鉄二日市駅操車場跡地で検出された「客館跡」も、平成26年(2014)に、その飛び地として追加指定されました。一方の「大宰府史跡」は、古代大宰府

野市、春日市、糟屋郡宇美町、佐賀県三養基郡基山町)にわたって所在しますが、それらが大宰府史跡あるいは大宰府関連史跡という形で一括できるということは、北部九州地域にとつて古代大宰府がいかに大きな存在であったかを証明しています。また福岡県には4件の特別史跡がありますが、すでにみたように、そのうち3件が古代大宰府に関わるものであることも古代大宰府の重要性を示すといえるでしょう(ちなみに、残りの1件は王塚古墳(嘉穂郡桂川町)です)。



こうした史跡のあり方を反映して、先にふれた「大宰府関連史跡に関する保存活用方針」は、8史跡を俯瞰的に捉え、一体的に保存活用することを掲げて、「大宰府関連史跡が生み出す心地よい空間」

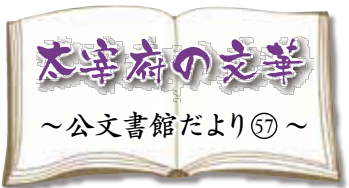
生活と共生する8つの史跡」を基本理念としています。今後、史跡ごとの保存活用計画が策定される予定ですが(大宰府跡は策定済)、それらの一体的な活用とともに、客館跡と関連する鴻臚館跡(国史跡、福岡市)、いわゆる大宰府羅城に関わる阿志岐山城跡(国史跡、筑紫野市)など、さらに視野を広げていくことも重要だと考えています。

これらの史跡は、2県(福岡県・佐賀県) 6市町(本市、大野城市、筑紫

鎮西米の東大寺運上

東大寺は、古代以来の基本的な財源である封戸（律令制における親王・貴族・寺院等への俸禄の一つ）が9〜11世紀に次第に形骸化してくるなかで、新たな財源確保のため、保安元（1120）年に観世音寺の末寺化を果たします。観世音寺領から東大寺へ納入される年貢米を鎮西米と称し、この鎮西米は、長きにわたって東大寺の諸法会を支える重要な財源として機能しました。

観世音寺領から東大寺への最初の年貢輸送が確認されるのは、末寺化して間もなくの大治2（1127）年のことです。同4年には、2041石余りの年貢米のうち、実に1518石余りが東大寺に収められていることが確認できます。しかし、次第にこの額は少なくなつたようで、建久6（1195）年、東大寺別当勝賢は400石の運上を定めています。さらに、勝賢没後には、観世音寺別当定勝の訴えによって、350石まで減少しました。鎌倉後期頃の状況を記したときされる「東大寺年中行事」（年間に行われる法会や行事の必要経費とその財源などを書き出した史料）でも、鎮西米の年貢総数を350石と記しており、少なくともこの時



期までは350石の運上で固定化されていたと考えられます。南北朝期以降は運上が滞り、量も大幅に少なくなりましたが、室町期にいたっても東大寺の史料中に鎮西米の存在は確認できることから、このころまでは鎮西米の運上が存続していたようです。

近年、三輪眞嗣氏が東大寺の財政構造に関わる研究として、鎌倉期における鎮西米の基礎的な考察内容として、「東大寺年中行事」の分析からみる鎮西米の財源としての特徴を明らかにされました。これによると、鎮西米は12月から6月にかけて観世音寺領庄園から数度に渡って東大寺に運ばれ、多額なことで東大寺内に数カ月わたってプールされる財源であったことから、他の財源で支払われるべき用途にも流用される柔軟性を有していたことを指摘しています。また、「東大寺年中行事」の分析からは、東大寺財政の中で大半を占めるのは寺領庄園ではあるものの、鎮西米は比較的少額の多様な用途に下行されており、庄園などからの収入を補完し、諸法会の勤修を維持するために不可欠な財源であったとされています。従うべき見解でしょう。

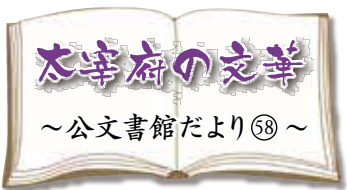
金のウソと替えましょ

— 鉄道開通と神事の盛況

明治22（1889）年12月11日、博多（久留米（当初は筑後川北岸に千歳川仮停車場）間で九州鉄道が開通します。二日市に置かれた停車場は（現JR九州二日市駅）、同35年に太宰府馬車鉄道ができるまでは、太宰府天満宮に最寄りの駅でした。列車のスピードは時速25キロ程度ドイツ製の機関車はそう大きくはないものだったようですが（『九州鉄道大観』）、貨車や客車を連ねて走る姿は当時の人々を驚かせます。

開業翌年の2月、九州鉄道は新聞に広告を出します。太宰府天満宮の神事、鷲替え・鬼すべに合わせ、2月25日と26日は臨時列車を運行するというものです。現在この神事は西暦1月7日に行われますが、当時は旧暦で開催されていたため（明治43年から西暦で開催）、この両日に臨時列車が設定され、そのための新たな車両も用意されました。

「ご存知、鷲替え神事では「替えましょ、替えましょ」のかけ声で参加者が各々の木鷲を交換し合うもので、取り替えた鷲に当たりが出れば「金の鷲」が渡されます。いつから金鷲の授与が始まったか、新聞に金鷲の記事が見えるのは明治23年の鷲替えからで、もともと人気の行事に、この年は前年末の鉄道の開通も手伝い大混雑、福岡市内も神事目当ての宿泊客で大いに繁盛した様子です（『福陵新報』。こ



の時金鷲を引き当てたのは穂波村（現飯塚市）の一男子。福岡日日新聞の取材を受けたためか、当選者は2月27日付紙上に「わたくしは純金の鷲を当てました。」という6行分の広告を出しています。余計な事ですが、1行1日分3銭という同社の取り決めで計算すると、この広告料は18銭。当時1紙の値段は1銭5厘でしたので、引き当てた幸運には、新聞代12日相当の出費が伴いました。

金鷲は明治27年の鷲替えから、太宰府天満宮が用意した2個と九州鉄道が寄進する10個と、全部で12個が定数となります。この年は金鷲の増量に合わせてか参詣者も増加し、鷲替え当日の二日市駅利用者数は1万2千人を超えました（『福岡日日新聞』）。以後、金鷲当選者全員の住所氏名は新聞で報道されるようになります。

明治40年、国が九州鉄道を買収したことで、会社側が出していた金鷲10個の寄進が途絶えてしまいます（『福岡日日新聞』）。その後は太宰府天満宮で全部をそろえ、毎年12個の金鷲が参詣者に贈られました。この頃の鷲替えは「宮崎宮の玉せせりに劣らない」激しさで、時には乱闘騒ぎもあつたようですが、幸運の金鷲の行方は群衆に紛れた神職さんに守られ、純粹な気持ちで神事に参加する人に、そつと当たりが手渡されていたようです。

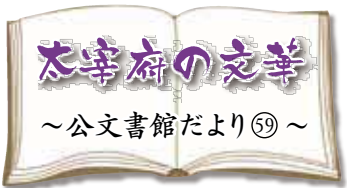
おおいにしんおう 大西真応と高崎山の猿

旧太宰府町の公民館が発行していた公民館報は、地域の文化向上を目的とし昭和22(1947)年に結成された新生会を母体とする太宰府町文化会が同25年に創刊した会誌「太宰府」を引き継ぎ、同27年に新たに刊行されました。

公民館報は市民や地域の活動内容の記事を主としますが、他にも警察や税務署などの呼びかけや、市民らの随想など多彩な記事をその特色としていました。この公民館報になぜか、高崎山の猿の記事が載っています。筆者は大西真応といい、かつて高崎山で猿の餌付けに尽力した人物で、大宰府戒壇院の住職でした。

大西はかつて大分県の高崎山にある「万寿寺別院」に勤めていました。当時、高崎山周辺は戦後の食糧難のなか、猿害に悩んでいましたが、大分市長の発案で霊長類研究者の調査をヒントに猿の餌付けを開始します。それは、餌付けを万寿寺別院の境内で行うことで周辺の農作物被害を減少させると同時に、猿見物によって集客を行い、観光資源に変えようとする試みでした。仏教者として生物すべてを平等に愛していた大西も、餌付けに協力します。

餌付けは昭和27年11月26日から始まりまずがうまく行かず、その後、大西一人で餌付けを続けました。定期的に法螺貝を吹いて猿を呼び寄せたり、餌の改良を重ねるなどしてなんとか餌付けに成功します。猿たちにモン、モンコと愛称を付けて接していた大西の苦勞が実を結び、高崎山は昭和28



年3月に「高崎山自然動物園」となり、同年11月、「高崎山のサル生息地」として国の天然記念物に指定されます。

大西は昭和31年に戒壇院へ移りますが、その後も猿への愛情は変わらなかつた様子が先に紹介した公民館報の記事に見えます。同33年4月、第9回全国植樹祭のために昭和天皇皇后が大分県別府市を訪問する事になります。全国植樹祭は、緑化運動の一環として天皇皇后臨席のもとで行われる記念行事です。新聞報道では天皇皇后の訪問日程に高崎山が含まれていませんでした

が、大西は天皇が高崎山を訪れることを大いに期待しつつ、しかし意のままにならない猿のこどゆえ「不安と焦燥とゴチャまぜ」に、戒壇院で遭遇の時を待ちます。訪問初日の4月7日からラジオをつけっ放しにして、放送されるニュースに耳を傾けます。そしてついに訪問最終日の4月

9日、天皇皇后の談笑の後に「キヤツキヤツと交錯するサルの声」をラジオから聞き取った大西は、その感動を次のように書き記しています。「小生は鼻スジから額にかけて熱いものがクウト上がったと思つたら瞬間目頭が熱くなり、思わず口の中でつぶやいた。モンよ出かした！モンよ出かしたぞー！」

タイミングよく天皇皇后の前に現れた猿たちを褒める姿に、遠く太宰府にあつても猿たちのことを思う大西の優しい人柄が窺えます。

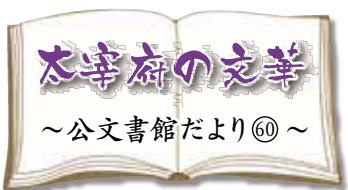
平安時代中期・後期の太宰府

日本史における時代の呼び名のひとつに平安時代があります。この平安時代とはいつからいつまでなのかという点について、わたくしは784年(長岡京遷都)～1185年(源頼朝による鎌倉政権の確立)と考えています。また日本史における時代区分に、原始・古代・中世・近世・近代・現代という分け方があります。これまで古代は、飛鳥時代・奈良時代・平安時代をいう、とされてきましたが、近年では、古代を平安時代中期(931年～1068年)までとし、中世を平安時代後期(1068年～1185年)からとする考え方が有力になっており、高校の日本史の教科書でもすでにこの時代区分が採用されています。

平安時代、とくに中期・後期に関する研究が充実してきたのは、ここ30年くらいのことといえます。それは、この時代を考えるための材料となる貴族の日記類などの史料が公開されるなどして、広く共有されるようになったためです。その結果、平安時代中期・後期における政治や財政のあり方の変化もずいぶん明らかになってきました。たとえば中央政府の財政は平安時代中期に、調・庸といった地方からの税がなかなか納入されないという事態をうけて、

その収取システムが大きく変わっていくことになりました。

さて、この時代の太宰府についてまず想起されるのは、太宰府政庁跡第Ⅲ期建物(の成立でしょう。それ以前にあった政庁跡第Ⅱ期建物は941年、藤原純友によつて焼き討ちされますが、発掘調査の結果によつて、焼失からそれほど時を経ずして再建されたと考えられています。それと前後するようにいわゆる「府官層」



(太宰府の下級官人、おもに監・典およびその権官・代官)とされる人々の活躍が目立ち始めます。一方で、ほぼこの頃から太宰府の長官に公卿(三位以上の位階をもつ貴族)が任命されるようになったとの指摘もあります。また、財政的にみても、中央政府の収取システムの変化にともなつて太宰府財政のあり方も変わつていったと考えなければなりません。平安中期・後期における太宰府に関する研究は、いま述べたようにまったくないわけではありませんが、必ずしも多くないのが現状です。わたくしは、前述のような中央政府の動向を常に念頭に置きつつ、この時代の太宰府を検討してみることが必要だと考えています。